

僕は、今小学校で黒板係をしています。黒板係とは授業の後、先生が書いた文字を黒板消しで消すとても気持ちの良い黒板のそうじ係です。ただし、他の生徒よりも多めにチョークの粉を毎日吸い込んでいるのではないかという、不安が少し付きまといますが、それ以外は、学校生活に大きくこうけんする立派な係を僕はしています。入学してからずっと黒板を使って授業を受けていますが、僕はあまり黒板のことをあまり知らないことに気づいたので、調べてみました。

黒板のような道具が初めて登場するのは、17世紀の教育者 コメニウスによる『世界図絵』だと言われています。



今のような黒板の形になったのはもう少し後で、1794年、フランスの学校にて、モンジュ教授が数学の授業で使ったのが始まりとされています。

黒板は、フランス革命という激しい時代の中、多くの学生を短い期間より効率よく教育する必要があったことから生まれた物でした。

このフランスで生まれた教育の道具は、アメリカへと伝わります。

1817年 今でもアメリカにある軍の学校 ウェスト・ポイントで、当時のフランスの教育のマネをして良いものを取り入れるようになりました。モンジュ教授の弟子によって、黒板とチョークの使用が開始され、どんどん他の学校にも広がっていきました。黒板が登場する前の教育は、先生が生徒一人一人に教えるスタイルが一般的でした。しかし、黒板が教室の前に置かれたことで、先生が黒板に書く「共通の情報」を、クラス全員で同時に見て学ぶことが可能になりました。これにより、生徒たちは同じテーマについて一緒に考え、理解を深めることができるようになりました。

日本に黒板が来たのは、明治時代初期のことです。1872年(明治5年)今の東京大学にアメリカ人教師スコットによって持ち込まれたのが始まりとされています。英語の「ブラックボード」を直訳して「黒板」という言葉が生まれましたが、当時はまだ「塗板(ぬりばん)」という呼び方をしていました。

明治時代の日本では、重い石の板を輸入することは簡単ではありませんでした。そのため、日本ではヨーロッパやアメリカのような石の黒板はあまりなく、代わりに木の板に墨や柿渋(かきしぶ)を塗った板が最初は作られました。日本では手に入りやすい木材を使ったオリジナルの黒板作りが始まりました。

日本の職人たちは、木製の黒板の書き心地を石の黒板に近づけるため、すごい技術を生み出しました。それが、板に塗るものに石の粉などを混ぜて、表面をとぎ出す「とぎ出し黒板」です。これには日本の伝統工芸の技術が必要でした。鏡台(きょうだい)を作る職人や、漆(うるし)の食器の職人さん、仏壇(ぶつだん)や家具、ちょうちんをぬる職人さんなどが、仕事を変えて、持っている高度な技術を、とぎ出し黒板作りにかかせてくれました。この工夫により、木製でありながら天然石のようななめらかな書き味を実現しました。ただの安い代用品ではなく、日本の技術が生んだ高品質な黒板を生まれました。

その後、昭和30年代に入ると、より高い耐久性や磁石の使用が求められるようになります。そこで登場したのが、現在の教室にあるような黒板で全国に定着しました。

黒板が深緑色をしているのには、二つの大きな理由があります。一つは、黒色は光を反射しやすく、目が疲れるので、より目に優しい色になりました。もう一つの理由は、塗るものが変化したからです。戦後、新しい材料が登場したことで、それまで難しかった黒以外の色が可能になりました。技術の進歩のおかげで、目に優しく落ち着いた緑色の黒板が可能になり、全国の教室へと広まってきました。

あと、心配なのでチョークについても調べました。毎日、大量のチョークの粉を吸い込みまくっているのではないかと、僕は自分の肺のことを心配をしてました。チョークの材料は無害で、毒は入っていませんでした。安心しました。しかし、あの粉を思いっきり吸い込んだり、粉が目に入ってしまうと、非常に良くない、とても最悪だと言うことがわかりました。黒板の消し方に工夫をすれば安全だと思います。これからは、しんちょうに黒板を消して、残りの学校生活、僕は何としてでも、この粉を吸い込むことを避けよう思いました。

黒板は、学校のノートのようなものだと思います。僕は黒板は日本からやってきたと思っていましたが、まさかのヨーロッパから、黒板が始まったのを知って、びっくりしました。時々学校の先生が、僕やみんなに

「黒板は緑色なのに、なぜ黒に板と読むのですか？」

と聞くので、ここで分かったことを、さっそくいかしたいなと思いました。